

An illustration of two men in suits embracing in a garden. The man on the left is wearing a dark suit and has his arms around the man on the right. The man on the right is wearing a grey suit and has his arms around the man on the left. They are standing in front of a large rose bush with several large, light-colored roses. The background is filled with green leaves and branches.

藍より出て

藍にそそぐ

side - 航一郎

Sakari Teshima

手嶋サカリ

Illust

amco

この作品は（株）心交社に帰属します。
無断複写・複製・転載を禁じます。

「宗谷様そうやです。承っております」

そのホテルは東京で仕事をしていた頃何度も前を通ったことがあって、けれど中に入るのは初めてだった。二〇〇〇年以降の高級ホテル建設ラッシュで出来た、外資系のホテルだ。

夜のフロントで名前を告げると、声まで滑なめらかな一流ホテルのフロントマンにカードキーを渡される。何となく気恥うづかしくて案内を断り、俯うつむいたまま航一郎こういちろうはエレベーターに乗りこんだ。

高層階を目指すエレベーターとともに、気分が高揚こうようしていく。連絡がないからまだ彼は着いていないのだろうと思うけれど、自然と早足になる。靴音を吸い込む絨毯じゅうたんの上を進んで目的のドアを開けると、ターンダウンされた無人の空間が航一郎を迎えた。

「いないのか」

分かりきったことを何となく呟つぶやいてみて、バゲージラックに鞆たもとを置く。二つ並んだダブルサイズのベッドの片方に歩み寄り、行儀ぎようぎ悪く身体を投げ出

すと、今度は途端とたんに身体が重く感じた。

三か月ぶりの東京出張で、予定を詰め込み過ぎたせいかもしれない。早朝の新幹線で東京駅に着いてからずっと、息をつく間もなかった。

航一郎は緩慢かんまんに首を傾けて、寝転んだまま窓の方を向いた。都心の一等地に建つホテルのわずかな曇りくももないガラスの向こうには、鬱陶うっとうしいほどきらめく夜景があった。この場所を逢瀬おうせに選んだ恋人の澄ました横顔が浮かんで、腹のあたりがむず痒くなる。

腕時計に目をやると二十三時を少し回った頃合いで、航一郎は肘をついて上半身を起こした。

今日も彼は秘書としてこの近辺——霞が関、永田町、赤坂のあたり——を駆けずり回っていて、終わりの時間が読めないと、言っではいたけれど。早く来い、と思わずドアを睨にらむ。顔を合わせるのは三週間ぶりなのに、会食の席で口にしたアルコールのせいもあって、このまま眠ってしまいそうだ。

もう一度メールを確認しようとベッドから降りて携帯を手にした瞬間、ド

アが開く音がした。

「すみません、遅くなりました」

低い声とともに、長身が部屋に滑り込すべんでくる。きつちりとしたスーツの着こなしも乱れのない髪もいつも通りで、年上の自分よりずっとこの高級ホテルに馴染んでいる。

「……何かありましたか？」

携帯を手に突っ立っているのを、彼が見咎みとがめる。直前まで来訪を心待ちにしていたことを悟られたくなくて、別に、とぶっきらぼうに答えた。

彼は航一郎に背を向けてクロゼットを開けながら、てきぱきと聞いてくる。

「航一郎さん、お食事は」

「……吉原さんの行きつけに、新しい仕事の人たちと行った」

「そうですか」

航一郎の答えを聞いて、彼がジャケットを脱ぎだした。その後姿を見てい

るうちに、うずうずとした衝動がわきあがる。航一郎はふらりと男に近寄ると、そのワイシャツの背中に額をつけた。

真っ白いシャツの、張りのある生地越しに仄かな体温を感じ、一日の疲れがふつとほどける。ゆつくりと呼吸をすると、微かに嗅ぎなれた整髪剤が香った。

「航一郎さん」

少し戸惑ったような声がして、我に返る。無意識のうちに、身体が動いてしまったらしい。慌てて顔を引くと、目の前の肩が上下して、ひとつ息をつくのが見えた。

顔を合わせるなりこんなふうにくつついて、呆れられたのかもしれない。そう思うと恥ずかしさにいたたまれなくなる。

自分でも、自分の行動に面食らっている。宗谷航一郎は、こんな甘えたがりではなかった。というかそもそも、誰かに甘えるということ知らなかった。他人のそばにいて落ち着くということもなかったし、疲れたとき、こん

なふうになんか誰かを求めることもなかったのに。

「……湊」みなと

おずおずと呼びかけると、どこか困ったような瞳の男が振り返る。

「軽くルームサービスでも取ろうかと思っていましたが。困った人ですね。それどころではなくってしまいました」

言葉の意味が良く分からなくて彼を見上げた次の瞬間には、航一郎の唇は塞がれていた。

「腰が浮いていますよ」

「分かつ、て………あ、んっ！」

彼の下肢の上で座る形を取らされていた航一郎は、ゆるゆると浮かせていた腰を掴まれて悲鳴を上げた。

「やっ、これ、ん、あっん、あ」

ぐいと腰を引かれ、彼を深く啜くわえこまされて目の裏に火花が散る。刺激が強くなり過ぎないよう挿入を浅くしていたのを見抜かれていたらしい。責めるように湊の先端が身体の最奥を突いて、既に張りつめている足の間のものがふる、と震えた。

その刺激に息を吐く間もなく、がっちりと掴まれた腰に彼の下肢が何度も打ちつけられる。彼を呑み込んだ内壁がうねり、こすれあう部分から快感が容赦なく広がりはじめた。

航一郎はがくがくと揺さぶられながら、湊の腹についた手をぎゅっと握った。

「あん、ん、これ、いや、なんだって……」

思わずそう漏らしてしまう。

付き合い始めて三か月、東京と富山に離れているからそれほど頻繁ひんぱんに会えるわけではない。そのせいか分からないけれど、会うたびのセックスはひどく濃厚だ。湊の愛撫は航一郎の身体を隅々すみずみまで知り尽くそうとするかのよう

で、与えられる快感には際限さいげんがない。

後孔での行為もそのひとつだった。航一郎の負担を少しでも減らしたい、という彼の愛撫でそこは毎回とろとろに解される。湊と繋がる悦びは航一郎にとってもかけがえのないものだけけれど、最近ではその前段で——言葉にしたくないけれど、そこへの指の刺激だけで——果てさせられるようになってしまった。

そしてそんなふう準備された内壁で彼のものを受け容れると、まるで全身が性感帯になったみたいに感じてしまう。意識を保っていられなくなりそうで、つい腰が引けるのだ。特にこの、自分の体重で彼のすべてを呑みこんでしまう体位は怖い。

手を突っ張って再び腰を浮かせようとする、湊がふっと息を吐いた。

「航一郎さん」

「あ、い、いやっていうか、慣れなくて……」

いや、などと言って湊が気を悪くしたかもしれないと思い、慌てて訂正す

る。湊は無表情に、腹筋の上の航一郎の手を掴んだ。

「ごめん、みな……」

「慣れて下さい」

「んっ！」

そう短く言うや否いなや、湊が腰をぐいと打ち付ける。突っ張った手を外されて倒れ込むと、湊は航一郎の上半身を抱え込んで激しく腰を使い始めた。

「あっ、やつ、あ、ん、あ……！」

強く突き上げられ、身体ごと揺さぶられて、快感にわけが分からなくなる。後ろの孔は突き入れられたものをぎゅうぎゅうと締めつけて貪むさばり、張りつめた性器は湊の腹に擦れて蜜を溢していた。

身体を、この男に作り替えられてしまったような気がする。

「慣れて下さい。怖がらないで。俺にはすべてを見せて下さい」

湊が荒い息遣いの中囁ささく。心の声を読んだような言葉に、航一郎は我を忘れて頷いた。

そうだ。湊のくれるもの、すべてを受け容れると決めた。どんな自分でも、湊は受け止めてくれるから。いつも冷静なこの男がたまに見せる獯猛さは、そのことを航一郎に教える。その声が、行動が、いささか乱暴でも。みなと、と何度も呼びながら、航一郎は押し寄せる快樂に身を委ねた。

誰かの傍らで眠り、目覚めること。半年前まで知らなかったその温もりは、未だに航一郎を戸惑わせる。でも今日の——というより、この真夜中の目覚めは、とりわけ航一郎を困惑させた。

嵐のようなセックスの後、深い眠りの中にいた航一郎は下肢の違和感に目を覚ました。寝起きの頭はそれが数時間前のあまりに激しい快樂の余韻だと考えていたけれど、しばらくして、湊が足の間顔に顔を埋めていることに気付いた。そして気付いた時には既に遅く、やめろと言っても年下の恋人は微笑むばかりでその舌は航一郎を追い立て、結局、彼の口の中で果てさせられた

のである。

午前三時。経験した中で最も淫靡いんぴな目覚めだった。

世の恋人たちは皆、こんなふう二人きりの夜を過ごしているのだろうか。ぐったりする航一郎をよそに、航一郎の放ったものを飲み下して上機嫌の変態は、ベッドを降りてグラスに水を注いでいる。

「……どんな夢を見ていたんですか？」

「夢？」

「眠る貴方が俺のことを呼んだので、つい手が伸びてしまった」

人が寝てるところになんてことをするんだ、と言ってやろうとしたのに、グラスを差し出ししながら男はしれっとそんなことを言う。航一郎はぱちぱちと目を瞬いた。

つまりそれが、今さっきの紳士的とは言い難い行為への、彼なりの言い訳らしかった。

「俺がお前を呼んでた？」

「ええ、それも繰り返し。ですから夢を見ていたのかと」

受け取ったグラスで喉を潤し、少し考える。自分は、彼を呼んだだろうか。眠りに落ちる前は数えきれないほどその名を叫んだ気がするけれど、その後。

「覚えてない。前までは良く……」

何も考えずにそう言いかけて、途中で口をつぐむ。

確かに半年前、湊と再会したばかりの頃、夢現に彼の名前を呼んでしまうことがあった。繰り返し、償えない罪の許しを求めて。

航一郎は両手でぎゅっとグラスを握りしめた。

グラスの中でゆらゆらと揺れる水面は、シートの上でどこまでも透き通っている。幼い湊が沈んだあの藍色の川とは違う。

「良く？」

「………なんでもない」

航一郎はサイドテーブルにグラスを置くと、傍らに滑り込んできた男を盗

み見た。

もう、あんなふうには湊を呼ぶことはない。自分は彼に許され、自分自身でも過去を受け入れた。

今、夢現に彼の名前を口にしたのならそれはきつと、彼の存在を確かめたいからだ。今夜再会するなり、無意識に彼にくつついてしまったのと同じで。

そう考えるとまた、彼の体温を感じたくなってくる。湊に触れて、安心したい。一日に何回もこんなふうを感じるなんて、甘えた子供にでもなったように、落ち着かない。

どうしたものが迷っていると、シーツの上に投げ出したままの左手が、湊に掬^{すく}い取られる。じんわりとしたぬくもりが伝わってきて、航一郎はもう一度目を瞬いた。湊は何も言わない。

航一郎は躊躇^{ちゆうちゆう}うことを止めて、寄り添う肩にそっと凭れた。感じる温もりが大きくなり、安らぎが胸を満たす。束の間、甘えた子供のままでいても

いいような気がする。

みなと、と、声には出さずに呼んでみる。心の裡うちで、呟くように。

あの藍色さえ飲み込んで、彼は自分のそばにいる。そのことを、知っている。

——ここにいますよ

そう答える声が、聞こえるから。

午前三時。暗闇の中の微かな灯りが、子供のように手をつなぐ二人を照らしていた。

了

藍より昏く秘めやかに
(ショコラ文庫)

発売日：2016年9月10日

著者：手嶋サカリ

イラスト：amco

価格：690円＋税

ISBN：978-4-7781-2063-4

http://www.chocolat-novels.com/wp_book/2063-4/